



Title	近世大坂の金融機能
Author(s)	中川, すがね
Citation	大阪大学, 2003, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44479
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	中 川 すがね
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 17424 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 15 年 1 月 27 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学 位 論 文 名	近世大坂の金融機能
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 村田 路人
	(副査) 教 授 猪飼 隆明 教 授 平 雅行

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、近世後期における大坂および大坂周辺農村の金融のありかたを、特に大坂の金融業者（本両替・錢屋）や一般商人が果たしていた金融機能と、相場形成および貨幣流通の側面から検討したものである。本論文は、序説と第一章から第十章までの 10 章から成り、10 の章は 3 つの部に構成されている。400 字詰原稿用紙に換算して、1028 枚にのぼる大作である。

本論部分の第一部「大坂本両替と錢屋に関する研究」（第一章～第三章）は、大坂の本両替仲間および錢屋仲間の基礎的研究である。第一章「大坂本両替仲間の組織と機能」では、大坂本両替仲間がどのようにして出現し、幕府の金融政策の中でいかに発展していったかを、江戸期全般を通じて段階的に把握している。とりわけ、田沼期の金融政策によって打撃をこうむった本両替仲間が再生する中で、巨大な信用体系が成立したことを強調している。第二章「錢屋と錢相場形成」は、ほとんど研究のなかった大坂の錢屋仲間の実態と、大坂および各地の錢相場の形成のされ方を明らかにしたもので、各地の錢相場と大坂相場との関係、漆商仲間や本屋仲間など、仲間内で独自に形成される錢相場について検討している。第三章「大坂の本両替仲間の規模に関する史料の考察」は、大坂本両替仲間の人数や構成員の名前を知り得る史料として、従来利用してきた諸史料の吟味を行い、利用にあたっての注意を喚起している。

第二部「大坂商人と金融」（第四章～第七章）は、本両替商や一般商人の経営分析を通じて、彼らの領主金融・商業金融へのかかわりを検討したものである。第四章「近世大坂の大名貸商人—鴻池屋栄三郎家の場合」は、鴻池屋の初期分家である栄三郎家の経営分析を行い、18 世紀初期には、酒造経営をやめて大名貸を中心とする利貸経営に傾斜し、その後も、他人資本を導入して大名貸を継続したことを明らかにしている。第五章「中原庄兵衛家『万留帳』の分析—資産家形成の一事例—」は、鴻池家別家で本両替の中原家が明治期に作成した「万留帳」から、同家の経営分析を行ったもので、幕末から明治期にいたる資産形成をあとづけている。第六章「近世後期大坂商人の経営と金融」は、近世後期の 2 人の大坂商人（木綿問屋と魚肥仲買）の経営分析を行い、彼らがそれぞれいかなる金融関係をもつていたかを検討したもので、錢屋的活動の実態や領主金融へのかかわりを明らかにしている。第七章「両替商別家難波武兵衛の経営と経済意識」は、本両替体制が崩壊しつつあった幕末期大坂の経済事象が、本両替の別家難波（平野屋）武兵衛の目にどう映ったかを、同人の日記などから明らかにしたものである。

第三部「非領国地域における貨幣と金融」（第八章～第十章）は、北摂の豊嶋郡における貨幣流通について論じたものである。第八章「摂津国豊嶋郡池田における貨幣をめぐる諸問題」および第九章「豊嶋郡農村の賃金と地域連合」は、在郷町池田および周辺農村の貨幣流通や通用錢相場、また公定賃金の動向を池田商人の日記や村方文書などから

分析している。第十章「大根屋改革について」は、豊嶋郡麻田に陣屋のあった麻田藩青木氏をはじめとする諸大名や、西本願寺の財政改革を担当した大根屋小右衛門の改革の手法の実態と特質を明らかにしたものである。

論文審査の結果の要旨

近世金融史に関する個別研究は数多いが、金融という、近世の人々の生産や生活に深くかかわる経済活動・経済事象を、トータルに把握しようとした研究は少ない。本論文は、個別両替商文書や両替商仲間文書、あるいは一般の商家文書、寺院文書、村方文書、藩政文書など各種文書を博搜し、金融業者や一般商人の金融活動、幕府の金融政策の影響、貨幣流通や相場形成、さらには商人の経済意識も含めて、近世金融史を包括的・体系的に論じたところに、まず大きな意義を認めることができる。

個別の課題について評価すべき点をあげるならば、まず第一に、幕府の各時期における経済政策が、本両替に与えた影響を明らかにしたことが指摘できる。大坂の金融の中核を担っていた本両替の動向は、幕府の経済政策を抜きにして論じることはできないが、本論文はこの点を明確にし、本両替の段階的把握に成功している。今後の大坂本両替研究は、本論文を出発点とすることになる。第二に、両替商や一般商家の経営分析を通じて、彼らの領主金融・商業金融へのかかわりかたを具体的に明らかにしたことがあげられる。とくに、鴻池善右衛門家の大名貸経営とは異なる経営パターンを示し、その多様性を指摘したことは意義深い。第三に、大坂周辺農村の貨幣流通や相場形成のありかたを、摂津国豊嶋郡という一地域に目を据え、地域における村連合の問題や大坂の金融機能との関係、また同郡に本拠をもつ麻田藩の財政改革の影響を視野に入れつつ明らかにしたことがあげられる。これは、地域金融論の方法を提示したという点でも意義深いものである。第四に、本両替や、藩の財政改革を請け負った商人の経済意識や改革理念を、その思想的背景をも含めて明らかにしたことである。このような分析は、従来あまりなく、今後の金融史研究の新たな展開を予想させるものとなっている。

もっとも、全体的に叙述スタイルが概説的で、それが読みづらさを招く結果となっていること、典拠となる史料の示し方が丁寧さを欠くことなど、本論文にも問題とすべき点がないではない。しかし、本論文の価値に較べれば、それらは小さな問題といるべきものである。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。